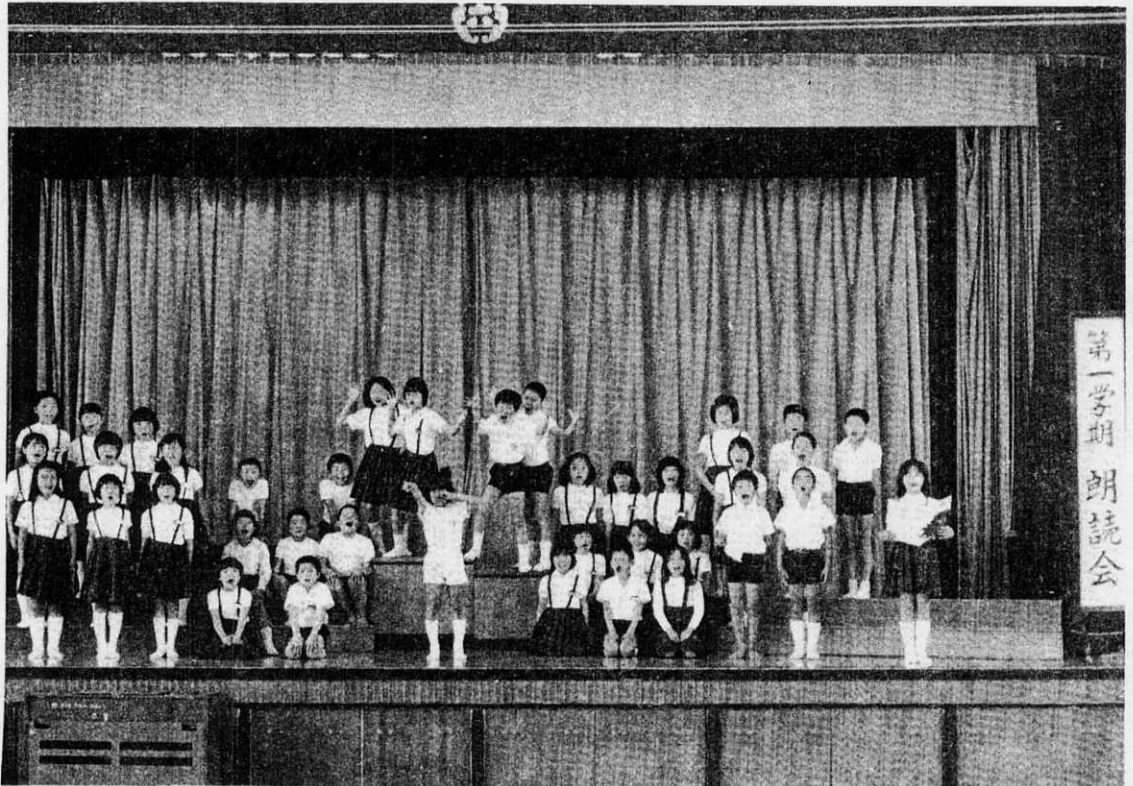


7月号

一人が読み みんなが読む
 明るいひびき
 快いリズム
 ひろがり
 高まり
 こだます声
 声は心に 心はことばに
 体でつかむことばと心

昭和56年 7月 1日
 編集／発行
 岡崎市教育委員会



(「八郎」群読の一こま一六名小)

— 教育随想 —

偉大なる思い出
岡崎

青山米夫



何を考えながら走っていたのか。ひたすら目的地、名古屋テレビ塔に着くことを念じていた。

昭和五十四年一月四日、東京日本橋から名古屋まで四百料マラソンの途中での岡崎の思い出は偉大なる一こまでであった。

もともと「物事は真剣には考えるが、深刻には考えない」というのが私の Motto である。が、この時ばかりは、深刻そのものであった。それだけに、岡崎は一生涯、忘れがたき地である。この時、（昭和五十四年一月四日）が、私に、岡崎を呼び戻してくれる。決して、嫌な、不愉快なものではない。今となつては快適ともいえる思い出の地である。

日本橋を出発してから八日目の一月四日朝、豊橋を出発し、小坂井の入口で、突然、おそれられた左脚関節痛によって走ることができなくなつてしまった。P T

A の方々の、あの手この手の応急手当は感謝感激で、名状しがたい。国道一号線の岡崎市の東入口から、ひたすら歩きに歩いた。美合病院で注射もうった。病院に行く時間のロスのおしかったこと。

一秒でも歩いて、一糧でも目的地に近づきたかった。この時の気持ちは、私以外だれもわからないであろう。P 長が、「よろめきながら、歩道橋を足で登るといふよりも、てすりにつかまつた腕の力でよじ登っている姿をみて、明日、本当に大丈夫であろうかと思つた」と、後で語ってくれた。

「とにかく、今日はまだ、足が動く。歩ける。明日はどうなるかわからない。歩ける今日のうちに、一歩でも名古屋に近づいておかなければいけない」と考えた。「ようし、明日、もし歩けなくなつたなら、松葉杖でも完走するのだ。俺は

松葉杖には、絶対の自信がある」と思つた。途端に、気が楽になつた。

かくして、一月四日は、故障の脚もなんのその、何と四十料余りを歩きに歩いた。宿泊は、東岡崎駅の近くの米家旅館であった。九時ごろ、食事前にお風呂に入った。例によつて、今日の、よごれた衣類の洗濯をした。この計画で、旅館に八泊したけれども、毎日、洗濯は、全て自分でやった。どんなに疲れた日であっても。小学校を卒業して下宿生活に入り、以来、高専、軍隊、会社と、二十年近く自分のものは自分でやってきた自主性にやるものである。

米家での翌五日の朝、五時前に目ざめた。床の中で左脚が動くであろうか。しばらくはおそろしくて、動かしてみよう気になれなかつた。動きますように神に念じた。「ああ！動くことができる。」「ようし、今日も歩くのだ、歩くのだ」と我が心にいいきかせた。

一念、執念が、肉体をかけめぐつた。力が湧いてきた。かくして、一月五日、十六時二十五分テレビ塔にたどりついた。最後のゴールは、みじめな姿で入りたくなと思つた。やせ我慢でも、最後の四、五料は立派に走ろうと思つた。人間の精神力とは偉大である。その通り立派に走つてゴールに入ることができた。ゴールの瞬間、疲れはふつとんだ。人間の感激とは、無限の神通力を秘めているものである。

（享栄高校校長）

海外こぼれ話



「MY・タスク」

佐々木恵子

マサチューセッツ州、アマーストのマサチューセッツ州立大学（通称ユーマス）で一昨年、夏季英語講習を受けてきた。

朝もやの中をリンゴの木の下の下を通り、寮からダイニング・コモン（食堂）へ向う「ハリー、ケイコ。ハウアーユー。」「ハリー、ジャスト、フアイン、ピーター」と友人に挨拶を交わすと、一日の始まりだ。月曜から金曜日まで、朝九時より午後三時半まで授業がぎつしりである。その上、毎日宿題はどつさり出る。その中に、コミュニケーション・タスクという課題がある。私に与えられた課題は、「どこに行くかとコントラセプティブ・ピル、（避妊薬）が手に入るか」である。

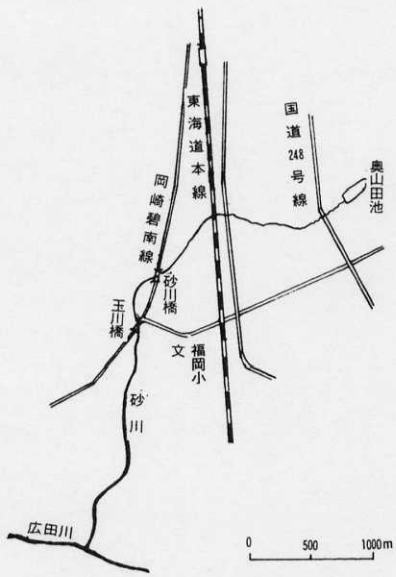
翌日、コミュニケーションの授業で発表しなくてはならない。早速、構内の病院に電話で問い合わせると、使用法を教えるから来てほしいと言われた。好奇心のつもりが、なんと二時間も説明を聞くはめとなつた。でも、ハンサムなドクタ

主要地方道岡崎碧南線を、若松町から名鉄バス専用道路の上を通り、福岡町方面へ少し行くと、砂川橋に出る。その右手に「一級河川砂川」という小さな看板が目につく。

砂川は、その源を若松町の奥山田池に発し、総延長約五キロ、川幅は二〜四メートル。若松町、上地町、福岡町を流れ西尾市との境、広田川に注ぐ。

昔は美しい川で、洗濯や水遊びをするのに最適の場であった。もちろん農業用水としても重要で、福岡町の中心をゆるやかに流れる川の提防には、夏になると蛍が飛び交い、人々が涼を求めたという。福岡小学校のすぐ西にある通称「ジャージャー」という堰は、水遊びや魚の子供たちで賑わっていたという。

魚も、フナ・モロコ・ハエ・ウナギ・ナマズ等豊富で、流し網をかけてとる人



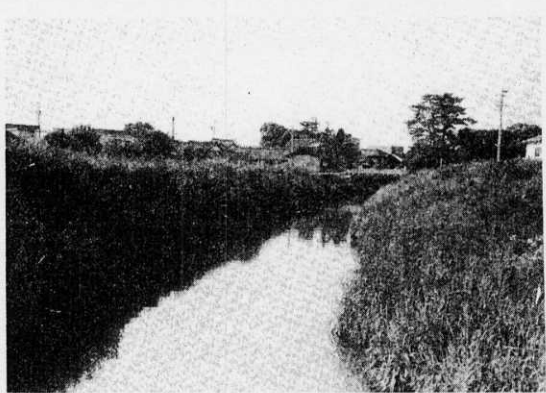
— ふるさとの山河 —

砂川

の姿をよく見かけたそうである。

しかし、戦後いつの頃からか上流に工場や住宅ができ、水は汚れ、ごみが流れ昔の面影は消えてしまった。タイヤが転がり、あきかんや生ごみが流れる砂川から人々は遠ざかり、いつしか、水遊びをする子供たちの元気な声も消えてしまった。

「このままでは砂川は、魚も住めないきたない川になってしまう」と憂慮した地元の人々は、何とか昔のような美しい川にしようと、昭和五十一年三月、福岡町新町の成瀬林右衛門氏を中心にして、「砂川を美しくする会」を発足させた。会長一名、副会長二名、会計一名、監査二名、理事十八名、顧問四名から成る組織をつくり、町の人々との協力体制を固めていった。この会の中心的活動は、河川パトロール、植樹、除草作業、河川一



(福岡小・板倉登)

斉清掃、川まつり、住民への啓蒙運動と幅広い。また、「ごみを川へ流さないようにしましょう」「川の水をよごさないようにしましょう」といった立札を立て地区の住民に訴えている。

その成果があつてか、最近ではごみを捨てる人もほとんどいなくなり、魚釣りに興じる人々の姿も見られるようになった。また、地元福岡中の生徒が、毎年二学期の始め、川ざらいや草刈り作業を行う行事も定着してきた。

こうして砂川は、昔の美しい姿を取り戻しつつ、人々の心をなごませながら、今日もゆったりと広田川に注いでいるのである。ふるさとの川を守ろうという、多くの人々の願いと共に……。

いう間に過ぎてしまった。

(城北中)

だれも注目しない

久野 正俊

ビルマ第二の都会マンダレーの夜、私は一人で買い物に行った。

その時の格好は、頭はボサボサ、胸はだけ、バッグをけさがけに背負い、はだしにゴムぞうりばきであった。腰に巻くロンジーというものは、まだ買つてなくてズボンで行った。

なぜこんな格好をするかというと、マンダレーの夜の一人歩きは少し危ないといわれていたからである。だから、ビルマ人のごとき風体で行けば、危ない目にもあわないだろうと思つたのである。ビルマ人のごとき風体といつてもそれほど自信があるわけではなかったが、ビルマ人そのものと他人が認める自分の顔さえあればなんとかなると、空元氣を出してでかけた。

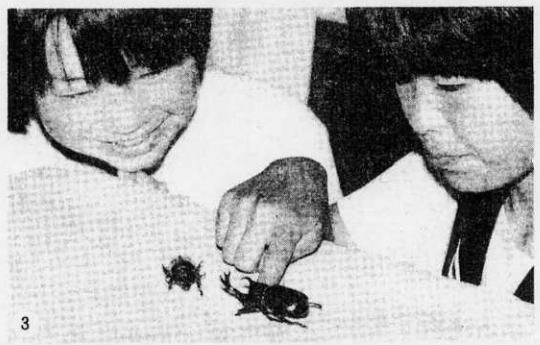
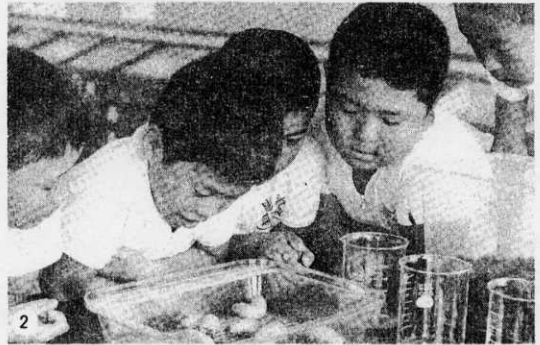
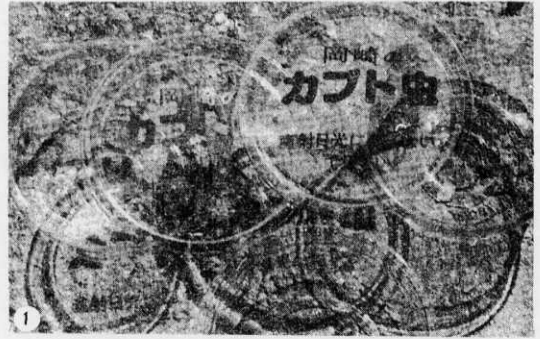
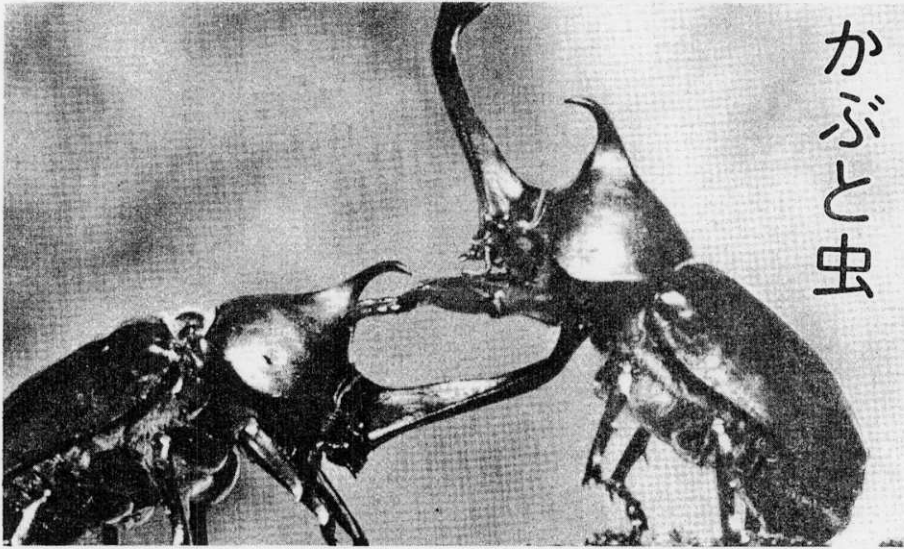
さて、その格好で極度に緊張しつつゼー(市場)に着いた。しばらくいろいろな店をのぞいて歩いた。しかし、そのころになると緊張もゆるみ、少し物足りなくなってきた。だれも私に注目してくれないのである。

目だたないための涙ぐましい努力は実つたのであるが、だれも注目してくれないということはつまらないことであつた。

岡崎再見

29

かぶと虫



「ねえ、かぶと虫飼ってる。」

「おかあさんに幼虫買ってもらったよ。」

「ぼくの、もうすぐ、さなぎになるよ。」

— 子どもの会話より —

コガネ虫科の黒褐色または赤褐色で光沢のあるかぶと虫。角の形が兜の前立てに似ており、子どもにたいへん人気のある昆虫である。

最近では、デパートやスーパーで雌雄二匹のバック入りで売っている。そのバックも、かぶと虫の成育を追って、幼虫、さなぎ、成虫のものと変わっていく。店頭には並ぶと、すぐ売切れてしまうそうだ。

この養殖かぶと虫、岡崎市内においても、しいたけ栽培の副業として昭和四十六年より始められた。天然のかぶと虫がしいたけのほだ木に産卵することを利用して、そこに網を張る。成育後、さなぎや成虫をバックに入れ、市場へ出荷する。全盛期には市内二十三戸で昆虫組合を結成していたということである。

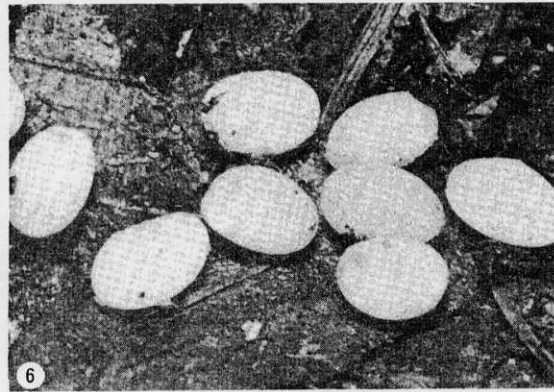
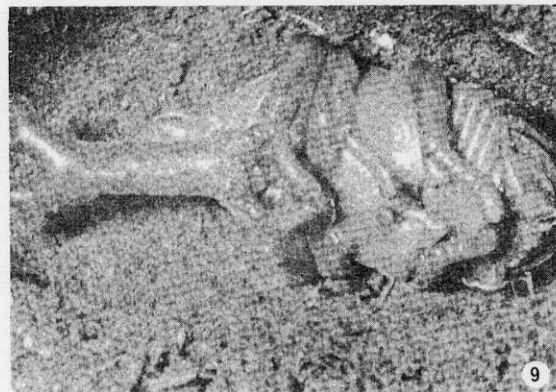
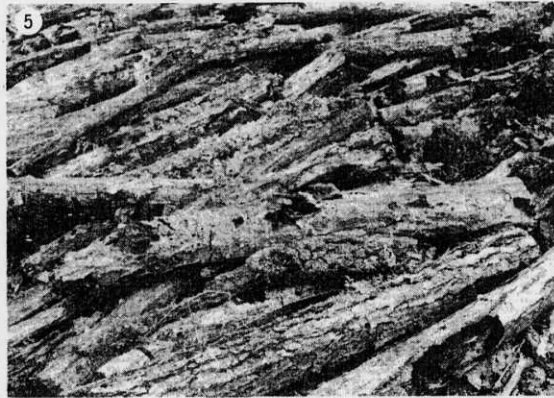
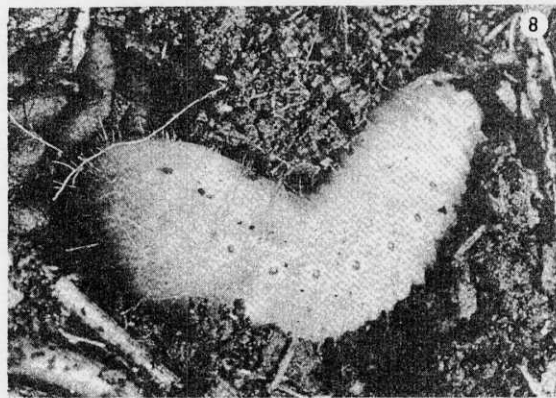
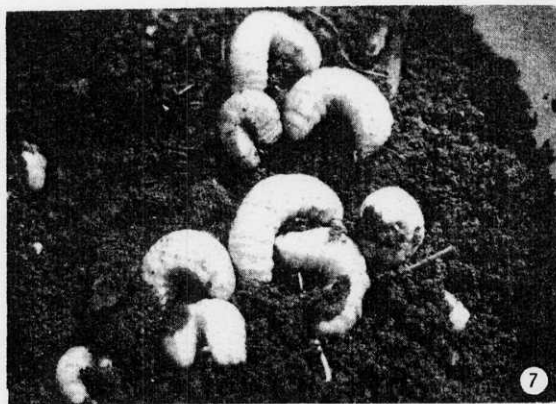
かつては、朝早く起きて、隣の木、森へと、かぶと虫、くわがたなど捕りに行ったものだ。見付けた時、手にした感触など、うれしいものだった。すがすがしい自然の中に、自然の恵みを感じ、いわば、夏の風物詩であった。今日では残念ながら、農薬散布のためか乱獲のためか、あまり見られない。

現代つ子はデパートやスーパーで買い求める。なかには自分で幼虫を掘って飼う子もいるが、自分のもの、愛玩動物の一つとして、自分のペースで飼育する。天然と養殖の違いだけだろうか。

子どもの観察は鋭い。成育の生態観察、動物への愛情などは昔と少しも変わらない。かぶと虫の格闘、角力、物を引かせての遊び。子どもと語り合い、夢を抱かせるかぶと虫は、昔も今も、子どものアイドルである。

兜虫み空へ兜さげて飛ぶ

茅舎



- ① 雄・雌二匹を入れる小売用バック。
- ② 幼虫を観察する飼育クラブ員たち。
- ③ 好奇心をゆさぶるかぶと虫。
- ④ かぶと虫はしいたけ栽培用原木の古木を好む。副業として活用される。
- ⑤ 古木に産卵。幼虫はこれを餌として成育し、さなぎから成虫となる。
- ⑥ 卵は一・〇×一・五ミリの黄白色。一週間ぐらいで孵化。十か月程度の幼虫時代を過ごす。
- ⑦ 成虫になる四十日ぐらい前に、鶏卵程の巣を作る。
- ⑧ 巣の中で、黄土色のさなぎとなり、雌雄の区別がはっきりする。
- ⑨ 成虫となって寿命一か月。

教育日々



心の入った字

矢作中 宇野 修

本校に赴任した時、「習字のやり手がないから引き受けてくれ。」と言われた。実力がなかったが、しぶしぶ受けるはめになる。こんな程度であるから恥ずかしい。

中学生で習字の好き嫌いを調べる。男子95%、女子55%が手が下手だから嫌いだと出る。習字は、他の教科とちがいが、作品が一分位の中で生まれ、自分なりに結果が出てしまうからである。

それは一点一画だけで、自分の実力がわかってしまう。つまり、何枚書いても、うまく書けない字が目の前に映るだけになる。中学生の鑑賞眼はテクニクより先行して、評価を即座に出してしまうといえる。



自分は素質がない、下手なんだ、という劣等感が「やる気」より頭をもたげる者が少なくない。こんな生徒たちにかかっている、教師はついおさなりに過ごしてしまふ。何とかしたいと思っても、生徒たちがついてこない。教師とのいたちごっこになってしまふ。

こんな現実から、生徒たちに励みをつけたい、という願望は捨てがたい。だが、生徒は器用でなければ字が書けないという先入観が強い。大人のように、字が下手でも恥をかって始めようと思うことが少ない。

字が下手でもなんでもよい、どうせうまくないからと引き下がる。「よい字とは味のある字だ。」食物にたとえると、美し

く思える食べ物でも、いざ食べると味が悪い。美しくなくても味がある。思惑だけでは実力は決まらない。

字でも同じだ。器用な人は美しい字が書ける。自他ともに美しさに満足して味を出す。そして、人を感動させるところまで深める。ここまでになれば言うことはない。生徒たちに、無器用でも、努力すればこの境地になると励ましてやる。

習字の練習では、目標をもち親も子も一体となって、真剣に打ちこむことだ。授業の中で、うまい字をほめるより、真剣に書かれた字を取り出してほめてやる。それが、心の入った字を見つめる力をつける基になることを忘れることができない。

「M子に続け」

常磐南小 満本妙子

「先生、今日ばく満点取れた。」
「私、山形へ行けるかな。」

昼の放課に、朝のかけ算と漢字のドリル学習の結果を楽しみに聞きに来る子供達で私の机の回りは、いっぱいになる。

五月から朝の短い時間を利用

して始めたのだが、これが思わぬ人気。それというのもドリル日本一周旅行を始めたからである。毎日、ドリルで満点を取ると、日本地図の中で北海道から順にシールをはりながら、沖縄まで行けるといふものだが、これがどうも子供達に好評で、毎日、楽しみにやっている。中でもとりわけがんばっているのがM子である。

このM子は、いたって口数の少ない子供だった。四月当初、クラスのみんなで室内ゲームをしている時、他の子供達が楽しそうに遊ぶ中、M子だけは、にこりともしなかったのである。

他の子供達とどこか違うなあと思いながら、二か月が過ぎた頃だった。ドリルの結果を見てあることに気がついた。

それは、勉強でもさほど目立たないM子が、このドリルで一番いいスタートをきっているということであった。これには、私自身も少し驚いてしまった。

とにかく、その日のドリルの合格発表は、特に力を入れて、「M子さん、山形へ一番のり！」

クラスの子供達が目が、一斉にM子へ向けられた。その時だ。ゲームでもにこりともしなかったM子が恥かしそうにしながら、



微笑んだのである。よほどうれしかったのであろうか。クラスの子供達の間も驚きから感心に変わり始めていた。

四月当初、子供達に言いきかせてきた「成せば成る」の言葉どおりM子は、がんばってくれたのだ。あれ以来、M子に影響されてか、他の子供達もやる気を見せ始めてきた。

帰りの会の合格発表を聞いては、大喜びでシールをはりに行く子。次はこの県かと地図帳をめぐる子。楽しい一時である。

「先生、日本一周が終わったら世界一周旅行にしよう。」

こんな声もあがっている。M子に続けとがんばる子供達の姿に、私自身も教える喜びを感じる毎日である。



中学校L1の更新とアナライザー新設

放送プログラム装置も三年で、全校へ

かねてから要望されていた中学校のL1装置の更新が、今年度からアナライザーの新設とあわせて実施されることになった。

岡崎市にL1装置が導入されたのは、昭和四十六年からです。十年が経過している。今回の更新でフルラボ方式（生徒個々が記録・再生できる機能を加味）となる。L1装置と同時に、反応分析装置（アナライザー）も設置されることになった。

これは、昭和五十三年度に文部省から出された新教材基準に組み入れられたことによるもので、岡崎市も本格的に教育工学的手法を取り入れることが可能になった。

今年度設置される学校は、視聴覚室のできる美川中学校ほか四中学校である。また、放送プ

【寄贈刊行物・資料等】

◆ふるさとの自然

岡崎の自然調査委員会 B 6
一九三頁

◆この一冊 第18集

梅園小学校現職教育シリーズ
B 6 七四頁

◆この一年

◆基礎学力の育成

矢作北小学校 B 5 二〇頁
常盤小学校 A 5 四九頁

◆健やかな心と体

岡崎小学校 A 4 八三頁

◆研究集録「ことばの力を育てる授業の研究」

矢作北小学校 B 5 七三頁

春枝▽福岡▽鈴木義治・鈴木健六▽藤川▽太田好則▽岩津▽平川和男▽矢作北▽細井浩平▽矢作南▽寛定

【中学校】▽南▽鳥居耕平▽竜海▽鈴木幸子・加藤昂▽葵▽白井央一・中村敏夫▽城北▽朝雄伸子▽河合▽三科嘉夫▽岩津▽鍋田時子・香村文夫▽矢作▽伊藤清▽六ツ美▽城所宣子▽矢作北▽本田金平

●県教育研究論文募集要項

一、研究範囲

学校教育に直接関連ある研究

二、字数

本文二、〇〇〇字以内

B 5判、横書き、左綴じ、四百字詰め原稿用紙三十枚以内。表、グラフ等は本文の字数に含む。

三、提出期限

昭和五十六年八月二十日

四、提出先

岡崎市教育委員会

第25回岡崎市中学校総合体育大会の記録

(昭和56年5月10日)

種目	会場	成績		
		優勝	2位	3位
陸上競技	岡崎公園グランド	葵	矢作	岩津
軟式庭球	岡崎公園コート	香山	城北	矢作・福岡
卓球	岡崎市体育館	東海	南	甲山・河合
体操	竜海中学校	竜海	甲山	葵
バレーボール	竜海中学校	竜海	矢作	甲山・葵
剣道	甲山中学校	矢作	南	竜海・福岡
ハンドボール	葵中学校	六ツ美	美川	葵・城北
柔道	岡崎市体育館	美川	竜海	葵・岩津
ソフトボール	甲山中学校	城北	南	甲山・岩津
軟式野球	南・城北中学校	城北	南	竜海・福岡
バスケットボール	城北中学校	美川	葵	竜海・東海
水泳競技	葵中学校	葵	美川	竜海・城北

●個人成績(陸上競技)

男子	氏名	校名	女子	氏名	校名
100M	11'9	江田 康宏	100M	13'3	山本 康代
1年100M	13'0	井沢 晋	1年100M	7'13(新)	佐野 順子
400M	56'2	梶 顕二	200M	28'2	田中 裕里
800M	2'12'1	水野 享	800M	2'32'8	鈴木ゆかり
1.2年1500M	4'47'2	天野 真	100MH	17'2	山田百合子
3000M	9'40'5	服部 光幸	400MR	55'3	六ツ美
100MH	14'5	明星 光信	低400MR	56'9	葵
800MR	1'43'0	城北	走幅跳	4 m 95	中間 洋子
400MR	51'0(新)	葵	走高跳	1 m 40	山田百合子
走幅跳	5m 69	明星 光信	砲丸投	12m53(新)	鳥居 晶子
走高跳	1 m 70	今井 章夫			
砲丸投	13m 30	佐々木洋志			

●体操競技

男子	氏名	校名	女子	氏名	校名
器械総合		竜海	器械総合		南
団体体操		甲山	団体体操		南
個人総合	広野 巧	甲山	個人総合	橋本佳奈	南
床	田中雅浩	甲山	床	橋本佳奈	南
鉄棒	広野 巧	竜海	平均台	橋本佳奈	南
跳箱	広野 巧	竜海	跳箱	山本 佳代子	南

●柔道

学年	優勝	2位	3位
氏名	校名	氏名	校名
3年	石原 一人	勝田 富雄	中村 充弘
2年	守山 勝己	増田 清志	神村 達也

天候 10日快晴 16日曇 17日曇のち雨 いずれも微風

北野用水取入口 竣工記念碑

所在地 岡崎市北野町



点

日名橋より矢作川右岸沿いを北に一・五キロメートル北上すると、北野分水堰がある。横に高さ二メートル余のこの石碑が建てられている。

北野用水の水源は主として、上郷地区から流れ出る家下・宗定両川の川尻であり、水源涸渇の恐れがでてきたため、昭和二十七年に矢作川の本流に取水口を求め、工事を行った。その記念碑である。

三百年程前、新堀村の本多又左衛門、小望村の小原権太夫が用水開削を企て、北野より矢作川の水を取り入れ、南流させた。

その流れは坂戸まで行き、矢作一帯を潤し、美田とした。これが新堀川（北野用水）の初めてである。

現在の北野用水は流路が変更された所も多く、コンクリート蓋や地下水路もあり、当時の土盛用水は見られない。水源も細川頭首工より取り、サイフォンで矢作川を渡り、渡刈から南下北野分水堰で六ツ美への水路と北野用水とに分岐されている。田植どき、水量は豊富で水の勢いは強く、激しい水音が聞こえている。

●カット

東海中 鈴木和人

日本の本を

- 夕暮れに蓼を植えて 新潮社 足立 卷一 ¥ 1,000
- 文章術 潮出版社 多田道太郎 ¥ 980
- しあわせな日本語 ブラザー印刷 加藤 明康 ¥ 1,000
- とっておきの話 PHP 研究会 扇谷正造編 ¥ 880
- 朗読術入門 あゆみ出版 永井 智雄 ¥ 1,500
- チャップリン自伝 一若き日々 新潮文庫 中野好夫訳 ¥ 360
- もしもし、聞いて、子ども 潮出版 子ども110番編 ¥ 880
- 囁の咄の話のはなし 晩聲社 春風亭一柳 ¥ 980
- 自分を創る ウェイン・W・ダイアー 渡辺昇一訳 ¥ 1,000
- 女のはたらき 平凡社 もろさわようこ編 ¥ 1,000

おがくずの中で白い巨体がまだうねっている。月報特集「かぶと虫」の取材を終えて、養殖場から八匹の幼虫をもらい飼育する。さなぎの状態の写真を取るためだ。

メ切日まで、あと十日、人の気も知らないで幼虫はまだ食欲旺盛。写真がとれるのはいつのことやら……

シオシア

シリーズで発刊される図書の多いこと。一冊ほしいなと思って「シリーズです」と言われて何万もする価格にたじろぐ。商魂たくましい業者の手と一概に片付けられない。ちよつと目ぼしいものがあると、すぐそれに乗じて規格品を作ってしまうことだけは、子どもにあてはめないようにしたい。

朝顔の一人一鉢栽培、けさも一年生の子が次々と集まってくる。「ぼくの大きいよ」「あつ、つぼみがついた」「先生、わたしの咲いたよ」と、子どもの歓声、喜びの顔。でも、なかには……

ふと、この子等の心身の成長はどうだろうかと思う。

スカンポの茎や葉をかじりながら水泳帰りの子どもたちが家路をたどる。なつかしい風物詩の一コマ。コンクリートのプールから、交通事故に注意して、舗装道路を急いで帰宅する今の子どもたちには、スカンポやイタドリを教えるすべもない。自然が一步、遠のいていくのは淋しい。